



二学期が始まりました。1年生は、この学期中に文理のコース選択を決定します。2年生は、卒業後の進路の志望をより明確にすることを意識しましょう。3年生は、進路決定に全力を注ぐ時期です。いずれにせよ、卒業後の進路を考える際に大切なのは、「自分自身を探る」ということではないでしょうか。ちょっと抽象的で大き過ぎる話題かも知れませんが、今回の通信では「自分探究」をテーマにしてみました。

夏休み中にオープンキャンパス（OC）や、金高主催のキャンパスツアー（CT）に参加した人も多かったことでしょう。1年生は、OCの報告書が夏休みの課題の一つだったそうですね。OC等に参加して、自分が何に注目し、どのように感じたのかを記録しておくことはとても大切です。体験を忘れないためだけではなく、**自分の興味・関心や価値観を探る手掛かりになる**からです。社会教育学者の立石慎治さんは、「もし、自分の体験を深掘りすることが難しいと感じるなら、『**いま手元にある感想を書いたのが、私ではない別の人だとしたら、その人はどのようなことを気にするだろう。何を大切にしていそうだろう**』という問いを考えてみるのもよい」と述べています（2026年7月17日付 大学新聞より）。

例えば、OCの感想に「研究設備が立派すごいと思った」、「学生と先生の距離が近かった」などと書いたとします。自分以外の人になったつもりでその感想を読むと、価値観の手掛かりが見えてきます。「この人は大学の環境を大事にしていそう」、「人同士のつながりや対話を重視していそう」などと読み取れるわけです。このように、OCは大学を知る機会であると同時に、**自分が何に反応する人なのかを知る機会**でもあります。

この文章を書いている私（進路支援部の教員です）の経験を例に挙げます。7月に福井県立大学海洋生物資源学部先端増養殖科学科（小浜市・かつみキャンパス）のCTに同行しました。実際に大学を訪ねてみると、はじめて見る研究施設に驚いたり、学生さんの企画力に感心したり…と様々な感情が湧いてきました。中でも印象に残ったのは、4年生に在籍されている眞壁喜一郎さんのお話で



す。眞壁さんは大阪府出身。小学2年生の時、敦賀市で行われた野外キャンプに参加し、魚を捕ることが好きになったことをきっかけに、県大への進学を決めたそうです（余談ですが、眞壁さんは今年5月にオープンした「おばま水族館」の館長としても話題になっています）。眞壁さんは「魚を捕ることが好きなので、漁師になることが小さい頃からの夢。今もその夢は変わっていない。『漁師になるなら大学で勉強する必要はないじゃないか』と言われることもあるが、**何かをとことん突き詰めるという経験は、必ず何かにつながるんじゃないか**」と語っておられました。この言葉が、私の心に深く刺さりました。

進路について考える時、私たちは「この職業に就くためにはこのことを学ぶ必要があり、そのためにこの大学のこの学部学科に進学する」という手順を踏むことがあります。進学目的がはっきりしていて、「自分の取り組みが社会でどう生かされるのか」についても考えやすいですね。しかし、私は、眞壁さんのお話を聴きながら「**直接何かにつながってなくても、自分が興味あること・好きなことをとことん追求し、その過程で人生が拓けてくるということもあるのではないか**」と、考えました。学習だけでなく、部活動に打ち込む、学校祭でこだわりを持って作品をつくりあげる、プライベートな趣味に没頭する…などなど、好きなことをやり切る経験が、人生のどこかで何かに結びつくことがあるのではないのでしょうか。また、「学ぶ」ということは、公式や文法事項など「何を学ぶか」だけが重要なのではなく、**様々なことに繋がる学び方や、学ぶ姿勢を身につけることこそが本質なのではないか**とも感じました。そんな私を「別の人」として読めば、「進路選択とは」「学ぶとは何か」ということに関心を持つ人間だと読み解くことができるでしょう（進路支援部の教員ですから、当然ですけど…）。

毎日、私たちは大小様々なことを経験していますが、自分を探る上で大事にすべきなのは、おそらく「**今の自分を表す言葉**」です。「自分の思いを自分の力で言葉にしてみる」という行為の積み重ねが、「自分を知る」ことにつながります。「自分が何に興味があるのか分からない」という言葉も、体験から得た大切な手掛かりでしょう。学校生活で最も長く、比較落ち着いて物事に取り組める二学期だからこそ、より丁寧に自分と向き合ってみてください。